



高等学校の
先生のための

特別支援教育の視点 を生かした

授業・学級経営



高等学校には、発達障害を含む特別な教育的支援を必要とする生徒がいる場合があります。学力もあり友人関係は良好でも、学校生活に意欲が持てない、教室を飛び出してしまうなどの課題が見られる生徒の中には、発達障害もしくはその傾向のある生徒であることが少なくありません。

これらの生徒は、特性を踏まえ、一人一人に応じた指導や支援を行うことで、持てる力を十分に発揮することができます。

また、特別支援教育の視点を授業や学級経営に生かすことは、支援を必要とする生徒だけではなく、すべての生徒にとってわかりやすい授業、安心して過ごしやすい学級をつくることになります。また、学力の向上や不登校未然防止などの効果も期待できます。

平成26年3月

埼玉県教育委員会

1) すべての生徒がわかりやすい授業

高校生活の大部分は授業で構成されています。授業にうまく参加できず、内容の理解が十分でなかったりすると、学習への意欲を失ってしまったり、場合によっては反発してしまう生徒もいます。



授業への参加

教室の環境調整

授業に意欲的に参加させるためには、不要な刺激を少なくするなど、環境を整えることが効果的です。情報が多すぎると学習に必要な情報が得にくくなります。

また、集中することが苦手な生徒に対しては、座席の配置を工夫することも効果的です。

支援の例

- 教室前面の掲示物の整理
- カーテン等による目隠し
- 座席の配置（刺激への配慮）

学習規律の確立

学習の規律を確立することで、生徒はどのように授業に参加すればよいのか分かりやすくなります。また、学習場面でのトラブルも回避しやすくなります。

- 発言や挙手のルール
- 準備や後片付けのルール

学習の流れの明確化

見通しをもって授業に参加するためには、授業の初めに学習のめあてを示すことが大切です。授業全体の流れやどこまでやったら終わりになるかなどを示しておくことで、参加しやすくなります。

- 授業のめあてを板書
- 授業の流れを事前に提示
- 次の活動を事前に明示

学習内容の理解

わかりやすい板書

学習のめあてや要点、考え、まとめなどを簡潔に示すなど、学習内容を的確に生徒に伝える工夫が必要です。

書き写すのが苦手な生徒に対しては、書く量を調節したり、プリントを併用したりすると効果的です。

支援の例

- マーカーの色の配慮
- 吹き出しや小黒板の活用
- 大切な部分の明示
- プリントの活用

授業の展開

授業の展開を一定の型にすることで、今何を学習しているのかわかりやすくなります。また、課題を区切って与えることで、学習しやすくなる生徒もいます。

聞く時間と書く時間をはっきり分けることで、ノートを書くことに集中できる生徒もいます。

- 授業の展開の一定化
- 学習課題をいくつかに分割
- 聞く時、書く時など、活動する場面の設定

学習形態の工夫

一斉指導による授業だけではなく、グループ指導を取り入れることで、学習内容の理解を深めたり、意欲を高めたりすることができます。

よりよい人間関係を形成する上でも効果があります。

- 話し合い活動
- 発表
- 役割分担

指示・提示の方法

指示を出す時は、できる限り具体的にします。「きちんと」「ちゃんと」などのあいまいな表現だと戸惑ってしまう生徒もいます。

説明する時には言葉だけではなく、見てわかる情報も添えるとよいでしょう。

- 具体的な言葉かけ
- どのように行動すればよいかを明確に指示
- 実物の提示
- 黒板へのメモ

個に応じた支援

生徒は様々な特性をもち、得意、不得意も異なります。学習理解を深めるためには、一人一人に応じた支援を工夫することが大切です。

- 机間指導時の支援
- ヒントカードの活用
- スモールステップ
- 学習課題の量の調整

2) 一人一人の生徒を大切にしたい学級経営

支援の必要な生徒もそうでない生徒も、学校生活の中で安心して生き生きと活躍するためには、一人一人を大切にしたい学級経営が必要です。



● ていねいな生徒理解

個性豊かな生徒たちは、成育歴や家庭状況、または障害特性など様々な背景をもっています。目の前の行動だけで判断するのではなく、小中学校からの引き継ぎや、生徒の意思や気持ちを読み取りながら、ていねいに実態を把握しましょう。

一人の生徒に多くの教師が関わる高校では、教師間で情報を共有することが大切です。

● 生徒指導との関わり

生徒指導上の課題を抱えている生徒の中には、発達障害やその傾向のある場合があります。これらの生徒は、対人関係や学習面等のちょっとしたつまずきや困難をうまく解決できないことがきっかけとなり、不登校や引きこもりなどの二次的な障害につながってしまう場合も見られます。（生徒指導提要：平成22年3月 文部科学省）

これらの生徒には、長所に注目し、「よさ」を認めることが大切です。

● 相談できる人や場

生徒自身が抱えている悩みや課題について、受け止めて相談できる人や場所があることが大切です。担任や養護教諭、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーター等による組織的な相談体制を確立することが重要です。

● 失敗への対応

失敗を恐れるあまり、意欲的に学校生活を送れない生徒もいます。結果だけではなく、経過やプロセス、努力に価値があることをていねいに指導します。

また、生徒が失敗してしまった場合は、次につながる適切なアドバイスを行い、心理的負担の軽減を図りましょう。

● 肯定的な働きかけ

適切でないかかわりや環境は二次的な障害を招いてしまいます。二次的な障害を防止するためにも、注意や叱責だけではなく、自分の「よさ」に気付かせるなど、自己肯定感を高めさせるような働きかけが大切です。

3) 組織的な取組（チームで支援）



- 発達障害と診断されていなくても、**困っている生徒**がいます。**教師の気付き**が大切です。

〈気付きのために〉

- ・「ほんとうのわたしを見つけてVer.2」（県立総合教育センター HP）
- ・特別支援学校のセンター的機能や心理の専門家などの外部の支援者の活用

- 生徒の実態や支援方針、支援方法等を検討するために、校内委員会を開催します。
- 既存の生徒指導委員会や教育相談部会を活用している学校もあります。
- 生徒の支援にあっては、個別の指導計画やサポート手帳などの情報共有ツールが有効です。

4) 進路（就職・進学）への支援

高校においては、生徒の将来の社会自立に向けた支援が重要です。本人や保護者の気持ちを理解しながら、社会自立につながる**関係機関との連携**を図ります。進路の支援に当たっても、メモや図の活用、スモールステップなど、**生徒の特性に応じたきめ細かな配慮**が必要な場合があります。

自己理解が基盤	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分の長所や短所、得意・不得意、学力や適性などについて、生徒の気持ちに寄り添いながら客観的に理解させます。 ● 教師は、生徒の苦手さへの具体的な対処方法について気付かせるとともに、進路選択に必要な情報を提供しサポートします。
ソーシャルスキルトレーニング	<ul style="list-style-type: none"> ● 進学・就職に必要な社会的なマナーやルール、場に応じた会話などについて理解をすすめます。
インターンシップ	<ul style="list-style-type: none"> ● 就業体験の際は、保護者との共通理解を図り、必要に応じて体験先との連携を図ります。
進学	<ul style="list-style-type: none"> ● 保護者との緊密な連携を図り、個別の教育支援計画、個別の指導計画を作成・活用することで、大学においても支援の継続を図れることがあります。

さらに詳しく知るためには

- * 国の施策や教育情報について（国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター）
<http://icedd.nise.go.jp/>
- * 授業づくりのヒントについて（埼玉県立総合教育センター）
http://www.center.spec.ed.jp/?page_jd=394
- * 発達障害について（埼玉県発達障害支援センター「まほろば」）
<http://www10.ocn.ne.jp/~mahoroba/>
- * 若者サポートステーションについて（埼玉県産業労働部就業支援課）
<http://www.pref.saitama.lg.jp/page/wakamonojiritsushien.html>